『娘とともに』

増田則代さん

六月の講演より一部抜粋

娘は、高校卒業後絵の勉強をしたいと県外の短大に入学し、アルバイト先で出会った男性と結婚しました。一人っ子なので、できれば手元にいてほしいとの願いはありましたが、どこで住もうと好きな人との生活は、きっと幸せに満ちたものになると思い、喜んで送り出しました。付き合っている時の二人は、娘が一歳年上ということもあって、なんでも遠慮なく話して時には小さな事で喧嘩をしても、どちらかが謝って仲直りするといった、どこにでも見られる普通のカップルといった印象でした。娘が自分で決めた人だからとあまり、詮索もせず心配もなかったのです。交際は約十年余りも続きました。卒業後実家に帰ってからも、週末には会いに行き、遠距離交際として順調に続いていました。夫は公務員をしていて、娘も特技のパソコンでインストラクターをして共働きでのスタートでしたので、経済的な苦労はないだろうなと思っていました。両親とは別居でした。付き合っている時は娘の方がリードしていたようでしたが、「少しの事で切れていつまでも怒っている」とか「俺のいう事が気にいらんのなら、帰れ」というような事を言われたと実家に帰ってきた時に言うようになり、次第に言葉がきつい内容になっていきました。「色が黒い」「太い」といった容姿についても言われたり、「だからお前は頭が悪いんだ」「そんな事も知らんのか」と能力で馬鹿にされたりもしていたようで、最初は言い返していた娘もだんだん聞き流しているようでしたが、聞き流しているのでなくずっと心にそれを貯め込んでいくうちに、心労で結婚後五年を境に「うつ病」を発症してしまいました。うつ病になったのは、「仕事をし過ぎて疲れたまま頑張ったから」と言いましたが、直感で夫のＤＶに遭っているなと思い、「病気がおさまるまで母さんの所に帰っておいで」と言いましたが、娘は「病院で薬を処方してもらっているので、それを服用しながら仕事も行っているし、家のことも出来ているからそこまでしなくても大丈夫。」と明るく言ったので、心配しすぎかなと思い娘の話をそのまま受けとめていました。それでも実家に帰った時に娘から聞く夫の言葉や態度はだんだんひどくなっていました。「ここを掃除しておれがＯ．Ｋ．だったらおいてやる」「もも（飼い猫）は家族だがお前は違う」娘は仕事で生徒に教える為の教材を手作りで用意しなければならなかったようで、たくさん持ち帰った時に限って、家の片づけや掃除などをあれこれさせて、宿題をする時間をくれなかったとも言いました。テレビも見せてくれないとかエアコンも許可がなかったらつけさせてくれん、そして、九時には強制的に自分の部屋（部屋と言っても二畳ほどの窓もない納戸）に行かされて、電気も消され、パソコンも携帯もつかわせてくれんから旦那が寝たのを確かめてから、宿題をする時があるとも言いました。聞くほどに腹が立って、私が夫の悪口を言っても娘は「私が病気で家の事をちゃんとできんからいらついとるだけで、悪いんは私やけん。」と言うばかりで、「聞いてくれるだけでいいから」というので、聞くだけで気が済んでいるのだと簡単に思っていました。私はそれがエスカレートしていくとも知らず、どこの娘も実家に帰ったらこうやって愚痴を言って気を晴らしては、また主婦として妻としてがんばっているんだなあと、のんきに思っていました。友人に一度聞いてもらいましたが「一人っ子やから心配しすぎと違うの？ドラマみたいに夫婦が毎日にこにこできるわけがない。小さなバトルは当たり前よ」と言われることもあり、他に子供がいない私は娘に集中しすぎなんだとも思っていました。「嫁に行ったらたいがいの事は辛抱ささな」と言った事も言われました。それでもいくら考えても娘の病気も夫の態度も心配でじっとしていられず、病気が治ったとしても夫に大事にしても貰えず、この結婚はやめさせようと徳島市内のある弁護士事務所にいきました。市が主催している「女性の為の相談室」や「ＤＶを受けている人を支援するグループ」の存在は知っていましたが、それは少し悩んでいるくらいの人が利用する処であって、私みたいに夫から娘を取り戻したいという深刻な相談などは受けてくれないだろうと勝手に思い込んで行きませんでした。こんな時に頼りにするのが弁護士なんだと思っていました。お金を払うのだから、秘密も守ってくれ法律をたてにきっと助けてくれると信じていきました。「夫が娘に辛くあたっているし、うつ病も患っている。本人は別居や離婚は嫌がっているが、どうしても手元に戻らせたい」と訴えました。しかし、その弁護士は私の話は単なる夫婦の不和としてしかとらえてくれなくて、「いくら自分の子供でも三十を過ぎた娘が帰らないといっているのだから見守るしかない。病気だけを心配しなさい。家に帰ってきたらゆっくり休ませてあげるくらいしか親はできない。そんな事ができる法律はどこにもありません。」と説教めいた返事を聞いただけで失望して帰ってきました。その時にうつ病への理解やＤＶの本当の深刻さを私が知っていたら、別の方法で娘をつれもどせたのにと残念でなりません。それでもあきらめなくて、娘には「弁護士さんと迎えに行くから身の回り物を持って待っているように」と言ったら、今まで私に大きな声を出しことのない娘が「どうしてそんなことするん。絶対帰らんから。基本仲良しなのにそんな事をするんだったら、もうここを出ておらんようになる。」と絶叫されてしまいた。それでまた、「連れ戻そう」というわたしの決心が揺らいでしまいました。今思えば娘はすでに夫にマインドコントロールされていた状態で、夫の言うとおりにしないと怒鳴られたり少しの事で謝らせられたりの日々で、四六時中夫の顔色や機嫌に気をとられ、夫への反論どころか通常の判断能力もない状態にされてしまっていたようでした。

以下省略

増田さんの講演を聞いて

最近、ＤＶが社会問題となっていて、ニュースでもよく見かける。先日、人権ホームルームで増田さんをお招きし、お話を聞いた。内容は、増田さんの娘さんが夫からの暴力や精神的な攻撃により、鬱病になり、最終的には自殺まで追い込まれたというものだった。

ＤＶの背景には昔から、家庭や職場などが、男性優位な社会構造と成っていることが挙げられる。また、職場での上司の圧力によるストレスもＤＶがおこる原因として存在する。「ＤＶは喧嘩」という見方もあるため、自分がＤＶの被害を受けていると認識せずとも受けている場合がある。逆に加害者側も暴力を自覚していないという場合もある。そのため問題が表面化しにくいという問題がある。ＤＶを無くしたいという声が多いが、現在は無くなっていないのが事実である。では、無くすためにはどうすれば良いか。多くの人が言っていることだが、一人で抱え込まずにもっと家族や周りの人に相談をすることがＤＶを回避する事につながると思う。自分自身でどうにかしようとすれば、どんどんストレスが溜まり、最終的に自殺という道を選んでしまうこともある。今は自分には関係ないと思っている人にも突然起こることかもしれない。相手に暴力や精神的な攻撃を受けたと思ったら、すぐに周りに相談することで被害者になるのを防げると同時に、これ以上被害者を増やさないことも可能になる。

三〇六ＨＲ　人権委員